16　　急な遷都の嘆き　　　　　　　　　　文法　助動詞①　き・けり

読解　情景から具体的状況をつかむ

また、治承四年㋐水無月のころ、にはかにりき。いと思ひのなりⓐしことなり。おほかたこの京のはじめを聞けることは、の天皇の、都と定まりにⓑけるより後、すでに四百余歳を経たり。ことなるゆゑなくて、たやすく改まるべくもあらねば、これを世の人安からず憂へあへる、①げにことわりにも過ぎたり。されど、とかく㋑いふかひなくて、よりはじめ奉りて、大臣みなことごとく移ろひひぬ。世に仕ふるほどの人、②たれか一人ふるさとに残りをらむ。に思ひをかけ、主君のかげを㋒頼むほどの人は、一日なりともとく移ろはむとはげみ、時を失ひ、世にあまされて、するところなきものは、憂へながらとまり居り。軒を争ひし人の住まひ、日を経つつ荒れゆく。③家はこぼたれてに浮かび、地は目の前にとなる。

語注

治承四年＝一一八〇年。

都遷＝都が他の土地に移ること。ここでは平安京からに都がされたことを指す。遷都。

嵯峨の天皇の御時＝実際は天皇の時に平安京が造られた。

淀河＝いまの京都市伏見区付近を起点に大阪湾へ注ぐ川。

【原文】

また、治承四年水無月のころ、にはかに都遷侍りき。いと思ひの外なりしことなり。おほかたこの京のはじめを聞けることは、嵯峨の天皇の御時、都と定まりにけるより後、すでに四百余歳を経たり。ことなるゆゑなくて、たやすく改まるべくもあらねば、これを世の人安からず憂へあへる、げにことわりにも過ぎたり。されど、とかくいふかひなくて、帝よりはじめ奉りて、大臣公卿みなことごとく移ろひ給ひぬ。世に仕ふるほどの人、たれか一人ふるさとに残りをらむ。官位に思ひをかけ、主君のかげを頼むほどの人は、一日なりともとく移ろはむとはげみ、時を失ひ、世にあまされて、期するところなきものは、憂へながらとまり居り。軒を争ひし人の住まひ、日を経つつ荒れゆく。家はこぼたれて淀河に浮かび、地は目の前に畠となる。

問一　次の「内容わしづかみ」の空欄に本文中の語句を書き入れよ。

治承四年、急な遷都があった。特別な理由もなくして遷都するべきではないので、［　　　　　　］たちは嘆きあう。仕方なく、［　　　］をはじめ［　　　　　　　　］たちはみな移ってしまったが、そうもいかない者たちは旧都で不平を漏らす。人のいなくなったかつての都は、［　　　　　　　　］一方である。

問二　波線部㋐とは何月の異名か。読みとともに答えよ。〈2点×2〉

〔　　　月〕〔　　　　　　　　〕

問三　波線部㋑・㋒の意味を答えよ（終止形でよい）。〈3点×2〉

㋑〔　　　　　　　　　　〕

㋒〔　　　　　　　　　　〕

問四　二重線部ⓐ・ⓑの助動詞の文法的意味と活用形を答えよ。〈3点×2〉

ⓐ〔　　　　〕〔　　　　形〕

ⓑ〔　　　　〕〔　　　　形〕

問五　［チェック問題］助動詞①　き・けり

(1)　次の活用表を完成させよ。〈1点×2〉

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| けり | き |  |
|  |  | 未然形 |
|  |  | 連用形 |
|  |  | 終止形 |
|  |  | 連体形 |
|  |  | 已然形 |
|  |  | 命令形 |
|  |  | 接続 |

(2)　次の傍線部の文法的意味と活用形を答えよ。〈2点×3〉

1　さきざきも申さむと思ひしかども、…（竹取物語）

2　「の僧正」とぞ言ひける。（徒然草）

3　ひ見てののちの心にくらぶれば昔はものを思はざりけり（拾遺集）

１〔　　　　〕〔　　　　形〕

２〔　　　　〕〔　　　　形〕

３〔　　　　〕〔　　　　形〕

問六　傍線部①とあるが、筆者はどのようなことについて「当然」であるといっているのか。最も適当なものを選べ。〈5点〉

ア　古くなったからとはいえ旧都を去ることを、世間の人たちが惜しんでいること。

イ　思いもかけなかった遷都を、世間の人たちが不安に思い嘆きあっていること。

ウ　貴族たちが次々に新都へ移る様子に、世間の人たちが不平を漏らしていること。

エ　特別な理由もなく行われた遷都に、世間の人たちが不信感を抱いていること。

問七　傍線部②を現代語訳せよ。〈6点〉

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問八　傍線部③とは旧都のどのような様子を表したものか。三十字以内で答えよ。〈15点〉

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

【解答】

問一　世の人／帝／大臣公卿／荒れゆく

問二　六月・みなづき〈2点×2〉

問三　㋑＝（言ってみても）仕方がない

　㋒＝頼りにする・あてにする〈3点×2〉

問四　ⓐ＝過去・連体形　ⓑ＝過去・連体形〈3点×2〉

問五　(1)〈1点×2〉

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| けり | き |  |
| （けら） | （せ） | 未然形 |
| ○ | ○ | 連用形 |
| けり | き | 終止形 |
| ける | し | 連体形 |
| けれ | しか | 已然形 |
| ○ | ○ | 命令形 |
| 連用形 | 連用形（カ変・サ変には未然形にも） | 接続 |

(2)　1＝過去・已然形　2＝過去・連体形　3＝詠嘆・終止形

〈2点×3〉

問六　イ〈5点〉

問七　誰が一人で旧都に残ろうか、いや誰もいない。〈6点〉

問八　多くの家が集まり栄えていたが、日が経つにつれ荒れていく様子。（30字）

〈15点〉

【現代語訳】

また、治承四年六月頃、急に遷都がございました。とても予想外であったことである。そもそもこの京（の都）の始まりを聞いたことには、嵯峨天皇（実際は桓武天皇）の御治世の頃に、都と定まってしまった時から後、すでに四百年余りを経ている。特別な理由がなくて、（都は）簡単に改まってよいのでもないので、このことを世間の人々が不安に思い心配しあっていることは、全く当然のことであった。けれども、あれやこれやと言っても仕方がないので、天皇をはじめとし申し上げて、大臣や公卿たちも皆すっかり引っ越しなさった。宮仕えをするような人が、誰が一人で旧都に残ろうか、いや誰もいない。官職や位階に望みをかけて、主君の恩恵を頼みにする程度の人は、一日であっても早く引っ越そうとはげみ、機会を逃し、世間からとり残されて、期待するところもない者は、嘆きながら旧都に残っている。（かつては）軒（の高さや立派さ）を争った人の屋敷は、日を追うごとに荒れていく。家は壊されて（その木材は）淀河に浮かんで（しまうほどになり）、（家があった場所の）土地はたちまち畑となる。

【補充問題】

問１　この本文の主題「都遷」について、「ふるさと」に残らなかった人はどのような人か。本文中から最初と最後の三字を抜き出せ。

問２　本文の内容に合致するものを一つ選べ。

ア　この度の遷都を決定したのは嵯峨天皇であり、前回からは四百年余が経過していた。

イ　帝を筆頭に、出世の機会をうかがう大臣たちは、一人残らず新都へと移

住した。

ウ　頼るべき筋のないものたちは、不安を抱えたまま移住することになった。

エ　問題を抱えたままの遷都であったため、新都も日を追うごとに荒れていった。

【補充問題解答】

問１　時を失～きもの

問２　イ